

業 種	航空
取組分野	事故の記憶を風化させないための教育の実施
テ ー マ	重大事故の教訓を風化させず、また安全運航の重要性を再認識する。
取組の狙い	<p>昭和60年8月12日、羽田空港発大阪（伊丹）空港行き日本航空123便が御巣鷹山の尾根に墜落し、520名の尊い命が失われた。この事故の悲惨さ、ご遺族の苦しみや悲しみ、航空安全に対する社会的信頼の失墜を省みて、日本航空株式会社（以下、JALという。）では二度とこうした事故を起こさないために、平成18年4月24日、大田区羽田空港に安全啓発センターを開設した。</p> <p>JALグループでは、この安全啓発センターを「安全の礎」とし、すべてのグループ社員がお客さまの尊い命と財産をお預かりしている重みを忘れることなく、社会に信頼いただける安全な運航を提供するための原点としている。</p> <p>なお、現在では、JAL社員の約95%が、事故後の入社となっている。こうした社員に対し安全啓発センターを研修施設として活用して教育することにより、事故の記憶を風化させてはならないという思いと安全運航の重要性を再認識させることとしている。</p>
具体的内容	<p>安全啓発センターは、JALグループ社員の安全意識確立を目的としており、以下に掲げる背景及び展示内容を有し、JALグループ社員のほか多くの見学者が訪れている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>JAL123便墜落事故 <p>JAL123便の御巣鷹山の尾根の墜落事故は、単独機による墜落事故としては世界最悪の犠牲者数であり、過去に例のないものであった。</p> </li> <li>JALアドバイザリーグループ <p>平成17年にJALグループに度重なる重大インシデントが起き、社外有識者5名で構成される安全アドバイザリーグループが設立された。</p> <p>同グループは、事故の教訓の風化を防ぎ、教訓を安全確立に向けて積極的に活かすために安全啓発センターの構築を提言し、その提言を受けて、平成18年4月に安全啓発センターが開館した。</p> </li> <li>安全啓発センター開設の目的 <p>安全啓発センターの開設の主な目的の一つは、JAL社員の安全意識の確立であり、新入社員から管理職まで幅広い層を対象とした安全意識教育にて活用されている。</p> </li> <li>展示内容 <p>安全啓発センターには、JAL123便の後部胴体や尾翼、後部圧力隔壁、ボイスレコーダー、フライトデータレコーダーのグラフ、エコノ</p> </li> </ol>

ミークラスの座席、救命胴衣、乗客の方々が残された遺書や家族に宛てた手紙、乗客の腕時計などの遺品、事故に関する新聞記事、そして事故の様子が写された写真等が展示されている。

また、世界の主な航空事故や、事故の教訓に基づきどのような改善がされたかを示す「安全航空の歩み」、「被害の拡大を防いだ事例」等が展示されている。

#### 5. 見学者

安全啓発センターは、JALグループ社員の研修施設であるが、社員研修と重ならない範囲で航空安全に関心のある方々にも公開しており、事前に申込をすることにより、多くの企業や個人の方々が見学を行っており、事故から30年経過した平成27年には、年間で延べ1.2万人が訪れている。



取組の効果

安全啓発センターには、これまでに約115,000人(延べ人数)のJALグループ社員が見学を訪れている。当センターにはJALグループ社員が見学後に安全に対する思い等を記述した「私の安全宣言」が展示されており、これらの「安全への誓い」には、事故の遺品や残存機体と接することによって湧き上がった思いや、安全を守ろうとする強い自覚が、様々な言葉で表現されている。

当センターは、社員一人ひとりが自身の安全運航への決意を新たにする場所として、JALグループの安全意識の確立に欠くことができない施設となっている。

事業者名

日本航空株式会社

<http://www.jal.com/ja/flight/safety/center/>

